■平成３０年４月２日例会：【会設立経過と故郷柱本・高槻】講演者：角　芳春氏

【高碕達之助に学ぶ会設立に関して】

高碕翁に関する会はもともとは柱物の公民館として高碕の生家を活用していたが、40 年以上たち古くなった。こわして新しいものを建てる話が出てきた。そこでこの建物を何としても残してほしい話あり、10 年ほど前から商工会議所・日中友好協会、観光協会、プラス高槻市の団体役員などかなりの人員数が集まり古い建物を保存してもらいたいことを市にゆうべきであるとの話になり「生家存続の会」が設立された。会長として奥本前市長にお願いした。その時は現市長の濱田さんが市長であり、市長室へ陳情に上がった。しかし結果的には無理であった。その以前にも奥本市長時代に柱本住民が市に何回も存続の陳情に行ったが、奥本市長の時から断られていた。そのような状況から、復興は無理だとの判断から会は解散された。そのあとあきらめていたが今回再度会設立の話が沸き上がった。

元商工会議所のＳ専務理事から再度提案あり、１年前から会合を持った。７～８名のメンバーが集まり、再度何とかやろうという話になり、会の名称を「高碕達之助に学ぶ会」として行動することになった。会長には私(角氏)お願いということで決定した。10 回ほど集まり会則など作成した。その中で今回 2/24 の会設立記念講演になったわけである。

その前に元商工会議所のＯ会頭に呼ばれ高碕さんに関する提案があった。「高碕達之助を何とかせなあかんな。後援に関し私も東洋製罐に頼みに行こうか」までおっしゃった。その中で会設立を進めたわけである。東洋製罐に関しては高碕家存続に関しては東洋製罐本社からも角家に来ら現物も見られた。高碕家・高碕の墓にも行かれた。いろいろな会社の事情もあり再建援助に関しては難しいとの回答があった。

今回の講演会は講演会 300 人の予定が 350 人になり資料も足らなかった、席を立たれる方もほとんどなく、質問者も多数出て来られ、3 時間もの講演になった。

さらにＯさんの感想として「参加者は三箇牧以外のいろんな地区から来られておった。あれだけ熱心な方がおられるには高碕達之助研究員制度を作ってはどうか」の提案があった。「参加者の中には講演をしたことがなくてもしゃべりたい人が必ずいてる、大きな事でなく小さなことでも得意なことでしゃべってもらい、文書に残せたり、講演ができるような主任研究員制度にしてはどうか。それほど高碕先生は研究する価値がある」という提案をいただいた。ということで今回第一回目として題目「故郷柱本・高槻を語る」で語らさせていただいておる。皆さんの中から話題を提供していただき細かいことを語り継げたらと思う。いままでにないような高碕論が出来上がるのではなかろうか。

（そのあと高碕さんの貢献に関するお話があり、さらに柱本に関しての話題に関し飛び入りで聴講生の話があった）省略。

■平成３０年４月１６日例会：【高槻市制７５年の歩み】講演者：中川修一氏

本日は高槻市の「高槻市制７５年の歩み」ホームページを参考にお話を進めます。

初代市長礒村弥右衛門はその時は珍しく、市長であり、市会議員であり、市会の議長のスーパー高槻市長であった。礒村さんがいてたから高槻市は成立したところもある。そのあとを中井啓吉さんが引き継いだ。中井さんは安満・成合地区磐手村の村長さんをしていた。助役されていて市長になった。終戦後の第一波の復興が行われたところで交代された。中井さんは１年半だけ市長で次の市長古川さんに代わられるが、しかしその間が４～５か月空いている。何があったか分らない。三代目の古川さんから公職選挙法に基づいて選挙で選ばれた。混乱期を乗り来られてきた市長である。その時に高槻市歌もできた（中川氏斉唱)。この昭和 22 年の風景は現在の彦根のあたりの琵琶湖の風景みたいで、田んぼがずうっと広がってる感じ。その市歌の中には戦争も終わり、この町も何とかしなければの思いが込められているようである。

昭和 22 年に新制中学の設立で第一中学が創立され（１年だけ高槻中学校の名前で呼ばれていた)、そのあと、第二中学、芝生に第三中学、富田に第四中学、樫田に分校としてスタートした第五中学ができた。唐崎の学生は茨木の養精中学に行った。

この時期で大事なことは古田市政時代の農地改革である。この制度は大地主からいったん農地を国が買い上げて小作人に安価で払下げされた。しかしそれをまた大地主が買い上げた例もあった。礒村家が一番の大地主であった。町によって農地改革のやり方が茨木とも違う。この時期が重要なのは農地改革が終わった 25,6 年から土地ブームか起こったことである。終戦後

焼け野原からの復旧が進み急速に工業化が行われ、地方からも働き手が都会にでてきて住宅不足が起こりかけていた（実際動き出すのは 32,3 年あたり）。スタートは農地改革からである。実際の土地価格として S26 年に 1,000 円のものが 20 年間で 30 万円になり、平成 3,4 年のバブル期は 2,200 万円にもなった。現在は 200 万円ぐらいであろう。

阪上市長は８年間市長をやり、そのあと国会議員になった。そのおり名神インター設置において反対された。55 年後にやっと今回設置された。

摂津峡が公園とした開発された（S33）.樫田村が高槻市に編入された。鈴木市政の時代からやっと下水道整備が進んだ（S36)。それまで田んぼに水を引く農業用水に下水が垂れ流されていた。この時代に人口 10 万人突破した（S38)。市民会館ができ（S39）結婚式が挙げられた。能見神社で儀式を行い、市民会館で披露宴を行うことが流行った。

吉田得三市長になる。昭和 42 年に日本の人口も１億人を突破した。高槻市も人口 15 万人突破。たった４年で５万人も増えた。昭和 44 年に 20 万人を突破し、昭和 48 年には 30 万人を突破した。年間 15,000 人程の増加である。小学校建設も追いつかなかった。

人口増に対応するため学校建設が無茶苦茶であった。一つの学校にもう一校プレハブが建つなど。また新しい学校ができたと思ったらまた校庭にプレハブを建てたりした。

（10 年間で小学校 17 校、中学校７校を建設）

昭和 45 年には人口急増化で今の場所に市役所庁舎を建設した。それまでは現在の松坂屋にあった。西に本館があった。警察署も松坂屋の南側にあった。

高槻祭りは 45 年の１回目から３回目までは商店街の人が頑張っていた。富田の商店街の人が来てた、そのお返しとして、富田の祭りに行くなどで皆が助け合った。

平成 20 年の資料によると年間高槻に来るのは 13,000 人、しかしよそに 13,000 人出ていってる。生まれるのが 3,300 人、死亡が 2,700 人で 500 人ぐらいが増えたり減ったりする。希望的に見て高槻の人口はほかの都市よりも減っていかないないのではなかろうかの考えもある。

この 45 年の時代は 2 万人来て 5,000 人で出ていき、15,000 人が残った時代である。

S49 年に西武百貨店がオープンした。その前の年に大火災を起こした。S54 に松坂屋がオープンする。高槻市として郊外の大都市としての位置づけができた。ゆとりと潤いのある都市になった。

江村さん就任した時、下水道整備を目標となさった。下水道普及率 20%前後であった。江村市長時代に急速に進んだ。現在は普及率 99%では。本体の下水道は完備しても家庭とつなぐのが個人の問題で大変な作業になる。

阪急の高架もこの時代からであり、完成までには９年かかっている。その間バス停が国道まで下がり、その時センター街の売り上げは 10%下がった。江村市長の有名な言葉として奥様が要介護になって「市長の代わりはいてても、妻を見れるのは私だけだ」と言って市長を退任した。平成７年が高槻では一番人口が多い年であった。

（＊これからの講演は、教育・環境・商業（商店街）を行いたい。）

聴講者からの意見も出た

１．日の出バスが以前は走っていた。日の出は高槻市には営業権を渡したくなかった。市は阪急電車を通じて営業権を手に入れた。高槻が住宅地として広がったのはバス路線の拡充にあった。全国的に見て行政で市バスを持っているところは少ない。尼崎でも阪神バスに移行した。

日の出バスが一生懸命バス事業を行ったため、今がある。人を呼び込むときにバスがある。それが市の発展になった。ゆえにその時代の先駆者は尊敬しなければならないのでは。

日の出バスはその時は木のバスであった。ゆえに道を曲がるときにバスが割れてしまったこともあったらしい。開発住宅のため市バスを引っ張ってくるときに開発業者がお金を払って援助していたのでは。

２．三箇牧村は茨木市に参入に賛成であった。鈴木市長さんの時代かに高槻に合併してもらいたいため、市バスを唐崎まで引っ張って魅力を出そうとした。

３．昔の市長はリーダーシップがあったのであろう。小学校建設にしてもよく対応できたものである。一生懸命やった市長がいてたのであろう。学校を１年に２校作ることができたということはすばらしい。今なら土地買収など考えれば何十年とかかる。

４．高槻の魅力は歴史しかなかった。歴代の市長が工業化・企業化などあらゆることを言いまくるなど、トップの努力はすごかったのであろう。人口をふやそうと思っていた。熱意！

以上